

令和5年度 第3回学校運営協議会及びコンプライアンス委員会議事録

R6. 2. 21 (水)

静岡県立沼津聴覚特別支援学校

1 学校運営協議会 (9:30~11:20)

〔参加者〕・運営委員5人、本校教職員10人、手話通訳者
〔欠席者〕 2人

(1) 教頭挨拶 (校長が欠席のため)

(2) 令和5年度 学校運営〔学校自己評価〕について (報告)

グランドデザインの5つの柱について・・・資料に沿って説明。

①教職員の専門性

教員の専門性を高めるため、昨年度からプロジェクトを立ち上げた。アンケートでは専門的な知識が身についたと答えた教職員が80%以上を占めた。次年度は、この知識をより授業や日常生活で生かしていくことが大切になってくる。プロジェクト自体は、今年度で終了となるが、研修課、自立活動課、各学部で意識して取り組めるようにするとともに、教職員自身がお互いに声を掛け合い、専門性を向上させていきたい。また、手話力については、朝のワンポイント手話を通じて確実に向上している。3年間実施できなかった手話検定も15人が受験した。今後も手話を覚えていこうという意識を高めていきたい。

②つながりのある学び・授業力

本校では、必ず一回は授業を公開し管理職や参観者からアドバイスをもらうことにしている。また、外部から講師を招き研修会を実施し、授業について振り返りを行った。全体としては、改善できたと感じる教員が多かった半面、改善が弱かったと感じる教員もあり、来年度はこの改善も含め丁寧に授業に向き合っていけるようにしたい。また、他校で学んできた教員が全体で報告できる場面を設け、より多くの教員の学びにつなげたい。今年は、ICTを活用した授業実践が多く見られた。子どもたち一人一人に合った学びを追求し、分かる授業を目指したい。つながりのある学びとして、子どもたちすべてを全職員で見守り育てるという校長の強い意思の元、授業や学び、日頃の何気ない会話などを通して、つながりを意識してきた。こうした本校の強みを生かし、次年度も子どもたち一人一人を大切に育てていきたい。

③子供たちの安全安心

体育的活動、健康管理、食育に意識して取り組むことができた。この一年間大きなけがや、事故、感染症の蔓延などなく、学びを止めることがなかったことは大きな成果だった。防災教育にも力を入れ、年間5回の訓練を通じて子どもも教職員も一人一人意識を高めて取り組むことができた。次年度は、更に実践的な訓練をし、より子どもたちが安全安心して学べる環境づくりをしていきたい。

子どもや保護者が相談しやすい環境づくりについては、教職員のアンケートでは高評価だったが、児童生徒アンケートでは、教員に相談できるという項目に対して77%にとどまった。このことについては、コンプライアンス委員会で説明する。

④地域との連携

今年度は、5年ぶりに寄宿舎と泉町と合同で祭りを開催することができた。祭りを通じて地域とのつながりの大切さを再認識した。来年度も、泉町、飛龍高校との交流を通じ、より地域とある学校を目指していきたい。

行政、福祉とともにセンター的役割を担ってきた。聞こえの相談に関しては54人、170件の相談に対応した。今後も頼られる存在としてその役割を果たしていきたい。

⑤職場環境

異動してきた教職員が多かったこと、仕事量が増えたこともあり、仕事量に偏りがあった。次年度は声を掛け合いながら効率の良い仕事を目指して組織として取り組めるようにしたい。お互い気持ちよく過ごす環境づくりとして学部全員で清掃に取り組んだり、積極的にあいさつを交わしたりできるよう働きかけをしてきた。また、アングーマネージメント研修を実施し、お互いに気持ちよく働ける環境は、円滑なコミュニケーションが大事であると多くの職員から意見が出された。お互いに思いやりを持ちながら伝え方や支え方を考え、実践できる職場にしていきたい。

(2) 各学部の・寄宿舎の取り組み

①幼稚部

各歳児のあらわれを見ると、最後までできることが増え、自分で取り組もうとする力や気持ちが伸びた。また、夢中になって遊ぶ、好きな遊びを見つける、対教員、子ども同士で言葉を含んだやりとりを楽しめる子どもが増えてきた。そのようななかかわりの中で、交流教育が充実し年間25回、居住地園交流は延べ10回実施できた。互いに思いやり、遊ぶことの楽しさを味わうことができた貴重な体験だった。今後も子どもはもちろんだが、保護者とも日々の生活の中で対話を深め、保護者教室などを通して信頼関係を構築して、学部、学校全体で子どもや保護者を支えていきたい。

②小学部

半数以上の教員が新任、初任であり他校種からの異動であった。その中でも目の前の児童と向き合いながら一人一人のキャリア、個性を生かして、一年間やってきた。5つの柱すべて満遍なく取り組めたと思うが、新規でのつながりとしては、ライオンズクラブさんにペットボトルキャップ集めの児童会の活動を表彰していただいたり、クリスマス会に来ていただいたりして交流ができた。安全安心に関しては、小さなけが、事故に関しても学部で共有、対応できた。交流は、居住地校交流、三校交流も充実してよかった。振り返ると、子どもの言語、言葉、学習の定着を図るためには、専門性を高めるための研修が必要だと感じる。子どもたちの指導については、表面的なことではなく、家庭で話したくなるような働き掛け、仕掛けが必要

だと認識している。教員がいなくても、いない場面でも自分ひとりで考えてできる防災教育を生活に般化できる形にしたいという課題が残った。

③ 中学部

今年度も生徒一人で、保護者アンケートでは交流で低い評価をいただいたが、高等部と一緒に体育、他の聴覚特別支援学校との部活での交流、第五中学校との学校間交流を行ってきた。ICT の活用でグーグルクラスルームを使って、静岡聴覚特別支援学校の生徒と自分の目標の共有することができたことが有効だった。また、コロナで自粛していた先輩を招いて直接話を聞くことができたことも大変有効だった。また、近隣の店舗に協力していただき職業調べということで話を伺うことができた。直接話を伺うことが生徒にとって伝わるが多く有効だった。どのように保護者に学校の教育活動を理解していただくかは課題が残るが、来年度考えていきたい。

④ 高等部

生徒は今 8 人。高等部の重点目標として、社会参加できる授業を実践すること、地域専門機関との連携を深め、本校の魅力を発信することに目標を置いた。今年度初めて地域の方と交流花壇をやらせていただいた。とてもよかったので、来年度以降も引き続きやっていきたい。2月に青空市場という形で地域の方に野菜の販売を行った。そのような活動を地道に続けながら本校の魅力を発信しながら地域住民の方の理解を得ていきたいと考えている。職員間のことだが、気持ちよく仕事ができないことがあったので、環境の改善をしていきたい。

⑤ 地域支援部

教育相談では 54 名、乳幼児教室では 7 名、通級指導教室では 27 名との関りが今年度はあった。園、学校、保健センター病院などとの関係機関との連携が進み、連携を柔軟にできた。来年度も連携は継続させていくことと自分たちの専門性も更に高めていきたい。

⑥ 寄宿舍

重点目標の地域に開かれた寄宿舍については、泉町との合同祭、ライオンズクラブさんとのボーリング大会、年間 6 回の清掃奉仕を行った。合同祭では、久しぶりに泉町子供会との盆踊りができた。生徒たちが子供会の子どもに対して自分から関わろうとする良いあらわれや積極性が見られた。また、飛龍高校の同世代の生徒にも積極的にかかわろうとする姿が見られた。来年も重点を置いて取り組んでいきたい。二つ目の、児童生徒の成長を保護者や教員と共有するということについては、保護者には帰省日に一週間の様子を書いた連絡帳を活用すること、教員には毎朝様子を伝え、共有をしてきた。今後も引き続き丁寧に対応していきたい。

(3) 保護者アンケートより (報告)

保護者からいただいた意見については、各学部で懇談や面談等を通して、保護者と話し説明を行い理解いただいた。

(4) 児童生徒アンケートより (報告)

あまりそう思わない、全く思わないに○をつけている児童生徒には、個々に担当が

話を聞いて指導してあるが、とてもそう思う、大体そう思うに○をつけているから安心というわけではないと思うので、日頃から子どもの様子をよく観察して必要に応じて指導支援していきたい。

(6) 運営委員の皆様より

(委員 A) 高等部に入って友達関係のことで学校に行きたくないと言うことがあり、心配を掛けたくないという気持ちから家では相談しないが、先生には相談をしていた。少しずつ話すようになり、学校にも行くようになった。これからも生徒と向き合ってほしい。

(委員 B) 気になることがあった。一つは、保護者アンケートの●がどう解決された出ていないので、どう評価したらいいか難しい。生徒アンケートの高等部の部分で、個別に話をしたという説明だったが、個別に話をして生徒が納得する問題なのか。個別に話をした結果、どういう課題が浮き彫りになったのか。高等部にとって大きな課題で、もう少し掘り下げる必要がある。自由記載の方が課題を掘り下げることができるのではないか。

また、専門性が大事であるが、専門性の底上げ、つまり初任者研修のようなプロジェクトと、時代の変化から出てきた課題に対しての最先端の情報で、ベテランの教員の専門性を高めていくことの両方がないといけない。今は昔の課題とは全然違っているので、単純に引き継いで行けばいいというわけではない。医療が進んできている時代に対応していく必要がある。

9歳の壁は聾学校だけの課題ではなく、一般の学校でもどう抽象的な思考を身に付けていくかは課題になっている。他県での良い取り組みがある。聾学校でも参考にできるのではないか。

(委員 C) アンケートを細かなところ、中身まで読めない。気になるのは、高等部。卒業後の進路に心の迷いがあるのは支援学校のみの問題ではないが、障害者であることで心配が大きくなると感じる。先日、静岡新聞で、支援学校を卒業した後の大学校という取り組みを知った。卒業生が安心するための将来の仕組みは、不安が解消されるひとつの道かと感じた。その不安がアンケートに出ているのではないか。子どもたちの不安を取り除けるような仕組みや先生たちの対応、話があれば信頼につながるのではないか。

(委員 D) 生徒がどのようにアイデンティティをもって卒業していくのか、聞こえない障害という意識を持っているのか、それを持って社会参加できるのか、ここで教育を受けた成果が見えない。はっきりと自分から聞こえません。だから手話が必要です。手話通訳が必要ですよという気持ちが見えない。医療の発達で人工内耳を装着した生徒もいて、自分が聴覚障害だと自覚することもなくなってきている。聞こえなくても聞こえているふりをするプライドも見られるようだ。一人の力では、壁にぶつかってしまう。どうやって生きていくのかすごく心配だ。聾学校で学んできたという自信はなくなってしまう。アイデンティティ、自主性を大事にして生き抜く力、生きてきてよかったという気持ちを持って

るようにしたい。困難を乗り越えていく力を教育で身に付けているかが不安である。

(委員 E) 地域に住む者として何かできることはないかとお手伝いをしている。交流花壇については、参加した者が来年も来たいと言っているので来年も是非お願いしたい。飛龍高校のフードコースの子たちが来たことが良かった。これまで飛龍太鼓が来るだけで交流がなかった。フードコースの子が来て、この子とスイーツを一緒に作って、売って交流ができて良かったと思った。

現在教育では特に主体性を求められ、教師が一方的に教えるのは教育ではないという考えがあり、では教育とは何かと考えてしまう。これと同じことがこの聴覚特別支援学校にもあるだろうし、キャリア教育ということでは通常級で身に付けさせるもの以上に背負っているものがあるのではないか。

(7) 学校から

(教頭) 学校自己評価を取るにあたって、全員に目標に対する自分の課題、成果を書いてもらった。課題については、担当の分掌の中で検討を行った。端的な言葉になっているが課題を受けてどうするという事は各分掌で練りこんでいる。このまとめをするにあたって、成果だと感じたことは、経験差はあったが一人一人が自分の成果を書いてあり、全員で共有している。

プロジェクトが違う校種から異動してきた教員の専門性の底上げに力を入れてきたことは確かである。聴覚障害教育を担っていける教員を一人でも多く増やしていこうと、自立活動課、研修課、各学部で、専門的な知識のある教員を中心にしながら学習会を丁寧に行ってきた。専門的な知識がある先生たちに対する最新の情報については、各学部で講師招聘研修を行う中で最新の情報をいただき、皆で共有することは行ってきた。もっと最新の情報を入手しながら、来年度は研修報告に力を入れていく予定なので、新しい知識を入れていきたい。

(高主事) 高等部の生徒アンケートでは、4名の生徒が「学校が信頼できる」の項目にあまり思わないに○をつけている。正直教員に対する不信感で付けていることは事実であり、管理職から指導が入っている。進路については、卒業後最低2年間のアフターケアを手厚く行っている。今の生徒は、コミュニケーション力、人間関係をやめてしまうことが多い。自立活動の授業の中で、人間関係やコミュニケーションスキルを身につける授業を1年生から入れている。会社などに入った後も、何か問題が起きた時は学校に来て相談できるようにしている。

(小主事) 本校が初めての担任は、本当に必要なところまで指導が行き届いていないのではないかということで反省が出た。先生がやれと言ったからやった、学校で楽しく一生懸命やっていることが家庭には生かされていなかったなどということがあった。なぜ先生は怒っているのか、指導しているのか、何が楽しかったのか、心の動きに合わせて最後まで教員が付き合うことが足りなかったことを保護者に説明させてもらった。その部分の充実を図るために、聴覚障害教育をやる、担任業をやるということにプラスして、言語指導まで心に沿った指導を

すると保護者に説明した。また、発音や考えを伝えるということについては、学校だけでは成り立たない。家でもキューサインを使う、学校と家庭で共通してやっていくことを共有している。教員としては日々専門性を高めるということが課題である。

(委員 E) 今、学校から説明していただいたが、多くの先生方が異動されたとか、初めての方が多いたとか素直に言っていて心が震えている。そういうことをスタートにして、日々努力していることが伝わってきた。色々な教師がいるわけだから、それぞれ色々な課題を持っていることは当たり前だと思う。それを真摯に受け止めていると感じた。学校力ということを考えると、今と昔とをあまり比べてはいけない。今は今の子供達を前に、今の教育課題の中で学校がどれだけ努力ができるか、努力をしているか、どんな目標を持っているか今後我々は見つめていきたいと思っている。

(委員 B) 教頭の説明にあったこういう思いで学校評価をやりましたという前提がないので、ひどく表面的に見えてしまう。各教員が自分の課題を設定してその課題と向き合って評価をしていることをどうみんなで共有化していくかということが運営委員会の前提にしているところだと思う。来年は、是非この部分をうまく表現できるようにお願いしたい。

(委員 E) 項目だけのものでなく、だから学校としては何が良かったのか、何が問題なのか、来年どうしていくのか、見えるものがあるとよい。

2 コンプライアンス委員会 (10:40~11:10)

〔参加者〕・運営委員 5 人、本校教職員 12 人、手話通訳者

〔欠席者〕 3 人

(1) 不祥事根絶の取組 (報告)

不祥事根絶のための取り組みをしてきた中で、大事なことは、みんなで話し合う、支え合う環境である。忙しくなると心が荒んだり疲れてしまったりして不祥事につながると考えられる。仕事の分担、声を掛け合うということを丁寧に行なってきたつもりだったが、来年度も同じ方向性で取り組んでいきたい。教員が考えたあいうえお作文を是非ご覧になってほしい。教員が大切にしていきたいことが書かれている。

(2) 後期教職員人権アンケート (報告) [生徒指導課長]

後期は児童生徒の呼び方の項目に、あだ名を付け加えた。あだ名で子どもを呼ぶ教員はいないが、いけないこととして意識を高めたい。このアンケートの目的は、数値を上げていくことはあるが、半年間の自分の言動を振り返って厳しく自分を反省することもある。前期と比べ数値が下がったものもある。それは教員が自分を厳しく振り返ったためだと捉えている。もちろん、数値が上がったものもたくさんある。それが、前期の結果を踏まえて後期により一層意識をした結果が出ていたと思っている。子どもの呼び方については、呼び捨てやあだ名で呼んでいるという項目よりも、呼び捨てやあだ名で呼んでいるのを見たことがある項目の方が若干高く出ている。それは無意

識で出てしまったり、職員室で子どものあわれの共有をしているときに、つい敬称を付けなかったりということもあるということで、いつどのような場面でも敬称をつけて名前を大切に一人一人を呼ぶということを意識していくことを全体の場で呼びかけを行った。自由記述欄にあることも、気をつけたいこととして全体の場で報告をしている。

(3) 児童生徒いじめ体罰ハラスメントアンケート（報告）〔生徒指導課長〕

難しい言葉、難しい概念もあるので、子どもの実態に合わせて担任がやりとりをして聞いたり、自分で答えることができる生とは自分で答えたりしたアンケートである。未記入となっているものは、子どもの実態で質問の意図が伝わらなかったり、正しい回答が得られないだろうという捉えがあったりした部分もあるので御承知おきいただきたい。第1回の会議の際に、校外で起きた悩み、困りごとにどう対応していくかというアドバイスをいただいたが、アンケートの中で「学校以外の場で嫌な思いをしたことがあったか」という自由記述の質問を作った。あると答えた児童生徒はその内容を詳しく記述をしている。そのことについては、担任や生徒指導課の教員が細かく聞き取りを行なっている。内容としては、家族関係、放課後デイサービスのことがあった。聞き取りの内容によって、事後の話をしたり、その後の見守りをしたり、保護者に知らせたりしている。アンケートの前に教員が気づいたり、子供から訴えがあったりして、アンケート前にすでに対応をしている内容もアンケートには含まれている。相談できる人がいないと答えた子どもが5人おり、そう答えた子どもの名前は学部や学年に伝え、様子の変化に気づけるように情報交換を密にする形をとっている。

(4) 相談について〔養護教諭〕

2月1日現在の保健室での相談件数は、10件あった。相談内容は、人間関係で困ったことの相談が多かった。限られた人間関係での距離感、コミュニケーションなどの悩みが多かった。また、イライラしてしまい自分自身の中で消化できず話を聞いてほしいということで来室したケースもあった。引き続きカウンセラーとも連携をとっていききたい。

(5) コンプライアンス委員の皆様より

(委員 B) 対人関係では、教師、子ども同士、家族というのがある。昔から、聴覚障害を持った子どもが聞こえている家族の中でうまくコミュニケーションを取れないということがあったが、その辺のことなのか。

(生徒指導課長) 家族のことをあげたお子さんは、環境の変化が苦手で、家族の一人が県外へ行ってしまったという環境の変化が負担になっている。また、進路について家族に話をしなければいけないが、自分の希望、保護者の希望、学校から見た適性というものが、本人が消化しきれずという部分もあり、個別面談や家族への連絡などかなり密に行なっており、すり合わせができています生徒だと思っています。

(生徒指導課長) 家で兄が暴力を受けているという訴えについては、本人、保護者に聞き取りをしたところ兄弟喧嘩の延長で、兄が手を出した、本人もやり返した

状況があった。見守りは続けている。

(委員 B) 親との関係についてのことはしないのか。

(小主事) 今回のアンケートには出ていないが、ある。

(委員 B) それは、個々の問題なのか、それとも聴覚障害を持った子がいる家庭の問題なのか。

(小主事) 聴覚障害が原因ではない。

(委員 D) 手話では、親しい間では敬称は付けないが、先生たちは、敬称の表現がない手話で話す子どもたちを見て、敬称を付けていないとどう判断するのか？聞かえないというアイデンティティがなし崩しになる。

(教頭) 基本的には、教員が子どもに対して敬称を付けて呼ぶという意識である。子どもを大切にしていこうということである。幼稚部では、ちょっと違うが。

(幼主事) 幼稚部の子どもは、敬称まで自分の名前だと思ってしまうことがあるので、自分の名前がしっかり分かるまでは意図的に敬称は付けない。

(生徒指導課長) 授業の中では、生徒たちは自主的に敬称を付けて呼んでいる。しかし、休み時間や校外の時間などは、それぞれの関係の中での呼び方で呼んでいる。

(委員 E) 言い方は難しいが、子どもたちの中で衝突があって、トラブルが起きることはあって当然。だからこそ集団生活をやる意味がある。普通中の大きな集団になると個々の衝突、トラブルは見えない。あの二人は仲が悪いな、悪口を言ってるなどわかってもらっても一々指導はしない。聴覚特別支援学校のように集団が小さいとどんなトラブルも教師に見えてしまう。それを、これは放っておく必要があるな、これは大人が入っていかないとかわいそうだなという判断の塩梅が難しいのではないかと。そういうことが職員室で話題になることはないか。

(小主事) 日常的にある。子どもも訴えてくる。介入が必要な案件なのか、その子の気にし過ぎなのか、判断する。担任が解決する場合もあるし、不安なことは相談がくる。情報は共有する。

(委員 E) 教師がこれは大丈夫と思っても、子どもたちにとっては、先生は何もしてくれなかったと受け取りアンケートに書くということがあるから、アンケートの結果というのは単純に見ることはできない。情報を学年に伝えるなど情報を共有する、共有した後どう対応するかということが悩みどころ。家庭の状況も絡んでくるかと思う。

(委員 C) アンケートに相談する人がいないという生徒が5人いるが、何か心に抱えていて相談する人がいないのか、今困っていることが特になくて大丈夫なので誰に相談するのかわからないのか、どちらなのかが気になった。学校の先生に相談できる、できない、家庭で相談できる、できないと色々なパターンがあると思うが、この辺りのこの5人を解消する策というのはあるのか。

(生徒指導課長) 今回この5名は、高等部の生徒であり、年齢的に相談しづらい年齢であるが、担任や寄宿舎の指導員、保健室で相談した生徒もいた。また、様子が変わったのでこちらから声をかけたこともあった。抱え込み過ぎると誤った方法で、

たとえば SNS で知らない人に相談してしまうことなども今の時代はあるので、担任や親以外の相談すべき相手を伝えていくことも必要だと考えている。

(教頭) 教員は相談できる環境を作ることができているつもりだが、実際には子どもたちは相談をどこにしたらいいかわからないでいる。ギャップがあることを教員は受け止め、しっかり意識していかないといけない。子どもたちには、安心して相談できる場があることを伝えていく必要がある。

(委員 E) 自分が高校生の際に絶対先生に相談することはなかったが、委員 D さんが言ったように手話が必要な時に手話が必要だと、困った時に困ったと言えるコミュニケーション力をつけていく必要がある。子ども達が将来困らないようにしていただきたいと思う。

(委員 D) 自分が困った時に、どうすればいいか自分で考えて解決する力を身につけることも大事。

(委員 E) それを受け入れる社会を作っていくことも大事。これで、二つの会議を終わります。

(教頭) 学校が抱えている課題や悩みを出すことができた。委員の方に多角的な意見をいただき、前へ進めることができると感じた。また、学校と繋がっていただいて学校を良くしていきたいという思いを共有しながら進めていきたいと思う。ありがとうございました。

(委員 B) 学校は運営委員会を評価する観点、運営委員を評価する観点を持った方が良い。

(委員 E) 学校でまた考えてほしい。